

著／秋山真琴
絵／スカラ（えんぴつ）

不明瞭世界の

Detective Family's unCleared World

探偵親娘



歓声。

突き抜けるような青い空のした、細かい霧のような水しぶきが降り注ぐ。

周囲を見回すと、肌色分が多くて、どこを見ていけばいいか分からなくなる。

現在地は東京都は練馬区の一部、某テーマパークの某プールサイド。海水パンツひとつ身にまとい、日陰に潜んで生きてきたことが分かる、貧相な肉体を持て余す。

眼鏡を掛けていないので、視界は、ぼかしフィルタを掛けたようにぼやけている。従って実際には、なにも見えていないのだけれど、下手に顔をあげていると若い女性の、もぎたての果実のような肢体に目を奪われていると誤解されかねない。仕方なく俯いて自分の影を凝視しつづける。

何十分ほど、その姿勢を維持しただろうか。いい加減、背中がじりじりと焼けて痛くなってきたなと思っていると、二本のすらりとした足が見えた。顔をあげる。

「おい、オヤジ！ せっかくプールに来たのに、なにやってんだよ？ 泳ぐにせよ、泳がないにせよ、とりあえず水着を褒めるだろ、ふつー。どーよ？ オレのナイスバデーを見て、言うことがあるだろ？」

セパレートタイプの水着に包まれた、ふくらみかけの胸を張っている少女が、腰に手を当てながら、こちらを睨みつけていた。はっきりとは見えないが、口調から察するに、ずいぶんと剣呑な表情だ。

「ごめんよ、愛梨。その水着、よく似合ってるよ」

「ふ・ざ・け・ん・な！！ オレは巡梨だつーの！ 愛梨のやつはスク水だよ。いくらメガネを掛けてないからって、それくらいは分かるだろ！」

「ご、ごめんよ……」

「あら～」

奇妙に語尾を伸ばした声が聞こえたので、そちらに視線を向けると、紺色のワンピースタイプの水着の、やはり凹凸のない少女が近づいてきた。

「だめよ、巡梨ったら。お父さんの前で乱暴な言葉遣い。お母さんに叱られるわよ」

「だってよー、愛梨。オヤジのやつ、いまオレとお前を見間違えたんだぜ？」

「仕方ないじゃないの、眼鏡をロッカーに入れてきてしまったんですもの。それに私たち、双子なので、見間違えたってふしぎじゃないわ」

「おいおい、ふざけんなよ。確かにオレらの外見はそっくりだぜ？ でもよ、水着もぜんぜん違うし、口調だって正反対だろうが！」

「あら。昔は、よくお互いのお洋服や口調を交換したじゃないの。私たちの入れ替わりを見抜けたのは、眼鏡を掛けているときのお父さんだけだったでしょ。いまは掛けてないからよ」

「お前なあ。最近はそんな遊びやってないだろうが」

「じゃあ、いまから……する？」

「お、おい！ いきなり脱ぎだすのはやめろ！ 分かった！ 分かったよ！！ オレが悪かった

。謝るから、ここで脱ぐのは止めてくれ！！」

「そうだよ、愛梨」

向かい合っていた少女の片方が水着を脱ぎだしたので、口を挟むことにする。

「ここで脱いだら日焼けしてしまうよ」

「分かりました、お父さんがそう言うのなら止めます」

「って、そういう問題じゃねーだろ！！」

東京都は練馬区の一部、某テーマパークの某プールサイド。

ふたりの娘に挟まれ、僕は、やれやれと肩をすくめる。

／

その夜。

ひりひりと熱を帯びた肌を、シャワーで冷やしてからダイニングに戻ると、遊び疲れたのだろう、愛梨も巡梨もソファのうえで眠ってしまっていた。つけっぱなしのテレビを消して、キッチンに向かい、ミネラルウォーターを飲む。

と、玄関のチャイムが鳴った。

こんな時間に誰だろうか。

娘たちを起こさないよう静かにソファの前を通り、玄関のドアを開ける。

「やあ、誠二。風邪は引いてないか？」

「第一声から心配されるほど病弱じゃないよ、兄さん」

そこに立っていたのは、練馬警察署に勤めている敏腕刑事にして、いまだに弟離れのできない義一兄さんだった。

「それは喜ばしい。今夜は久々にお前と酒でも飲もうと思ってね」

そう言って兄さんは、手にしていたスーパーの袋を掲げてみせた。半透明のビニール袋の向こう、箱に入ったウイスキーが見えた。

「なに、また難事件なの？」

「おっと、さすがは俺の名探偵、早くも事件の気配を嗅ぎ取ったか？」

「僕もいい加減、学習するよ。兄さんはいつも難しい事件に行き当たると、酒を持ってうちに来るじゃないか」

「ははは、ばれていたか」

「まあ、いいよ、入りなよ」

「うむ……お？ 今日双子が来ているのか？」

兄さんの視線の先には、脱ぎ散らされたスニーカーと、丁寧に揃えられたローファがあった。

「ああ、疲れて眠っているけどね」

「そうかい。それは残念だ」

愛梨も巡梨も兄さんの大ファンだ。

残忍な殺人犯を追いかける刑事という職業に憧れる年頃なのだろう。それに僕と違って、兄さ

んは鍛え抜かれた肉体を持っているし、いつもスーツを着こなしているナイスガイだ。ふたりが慕うのも分からなくない。

「まあ、俺はお前と話したかったから、お前さえ起きていてくれれば問題ない」

「ははは。まあ、あがってよ」

スリッパを差し出しながら、きっと、兄さんがいつまで経っても結婚できないのは、これが原因なのだろうと思う。

キッチンに戻り、食器棚からグラスをふたつ取り出して、ロックアイスを放り込む。それから、お菓子箱から、つまみになりそうな乾き物をピックアップし、皿に盛る。

それらを持ってダイニングへ向かうと、兄さんは既に上着を脱ぎ、ワイシャツの袖をまくっていた。僕の枯れ木のような腕と異なり、兄さんのそれは丸太のようだ。低学年の頃は、愛梨も巡梨も、よく兄さんのあの腕にぶら下がって遊んでいた。

「バランタインの三十年物。いい酒だぜ」

「へえ」

ウィスキー通の兄さんは、にんまりと笑いながら、差し出したグラスに琥珀色の液体を、とくとくとく……と注いでいった。

「さあ、乾杯としよう」

「乾杯」

双子を起こさないようにグラスを鳴らし、余計な音をたてることはしない。軽く持ち上げてから、そのまま口元に運ぶ。

うーむ……。

グラスをテーブルに戻し、皿からジャイアントコーンをつまみあげて、口のなかに放り込む。兄さんはと見ると、極上のウィスキーに酔い痴れるように、放心した様子で虚空を見つめている。正直、ウィスキーの美味いまずいは、よく分からない。

二度、三度とグラスを口に運び、アルコールを十分に堪能した兄さんは、やがてグラスをテーブルに置くと、さて、と言った。

「相談したいことがある」

「うん」

「少し前に中年男性が、マンションの階段から突き落とされて殺された事件があった」

「それって、シティハイツ練馬のこと？」

「そうだ、よく知ってるな」

「テレビでやってたから」

類推は容易い。

練馬警察署に勤めている兄さんの管轄は、当然だけど練馬区内に限られる。

そして定職に就いていない僕は、毎日、テレビを見て、近所を散歩するくらいしかやることがない。近所で事件があれば、気がつかないわけがない。

「犯人は分かっている。と言うか、向こうから名乗ってきた、と言った方が正しいだろう」

「じゃあ、解決してるんだ」

「ところが、そうじゃないんだ」

「どういうこと？」

「犯行現場の付近で聞きこみをしていたんだが、てっきり警察に見抜かれたと思ったのだろう、犯人は勝手に自白してきた。しかし、こっちが分かっていないことに気づいた瞬間、手のひらを返したように『自白は冗談です、私は無関係です』とシラを切り始めた。これは妙だなと調べてみると、状況証拠がどんどん出てくるわけだ。その男——まだ正式に犯人と決まったわけではないから、仮にAとしようか。AはBという女と付き合っていたんだが、このBはネット上で被害者からストーキングを受けていた。mixiやTwitter、2chのログを漁ってみると、出るわ出るわ。あれは、もう病気だな。どこまでがほんとうのことかは分からないが、とにかく酷いことが山ほど書かれていた。それでBもちょっと心が疲れてしまったんだらうな。Aと結婚の約束までしていたみたいだが、それを反故にし、会社も辞めて、実家に帰ってしまった」

「つまりAには被害者を殺すだけの動機があった、と」

「そうだ。けどな、問題がひとつ。これは、後から分かったことだが、被害者とBは会社の同僚だったんだが、被害者とAの間に面識はないし、Bも、まさか同僚がネットでストーキング行為を繰り返しているとは、夢にも思わなかったそうだ」

「なるほど。Aには動機があったけれど、誰を殺すべきかは知らなかった、と」

「相変わらず話が早いな。いま俺たちが調べているのは、まさにそこだ。いかにしてAは、ストーカーが被害者であることを特定できたのか。……どうだ、分かるか？」

「分かるか、って」

思わず苦笑する。

「兄さんは僕を安楽椅子探偵かなにかだとでも思っているの？ 僕は、ただの二十代無職だよ。分かるわけが」

ない。——という科白は、チャイムの音で遮られた。

こんな時間に誰だろうと思いながら玄関のドアを開けると、そこに立っていたのは仕立てのいいスーツに身をまとった初老の男性だった。

「ああ、高宮さん……でしたっけ。こんばんは」

「お嬢様はいらっしゃいますか？」

わりと丁寧に挨拶したつもりだったけれど、御厨家に仕える執事の高宮さんは、ぶっきらぼうに言い放った。

一瞬、ムっとしたけれど、このひとに怒っても仕方がないことだと思い直す。このひとは職務に忠実なだけなのだから。

「ええ、ふたりともいますよ」

諦めて部屋の奥を指差すと、高宮さんは「失礼します」と口早に告げると、素早く靴を脱ぐと、つつかつかとダイニングへ入っていった。

玄関のドアを閉めてから追いかけると、ダイニングでは高宮さんがソファの前で膝を折り「愛梨様、巡梨様、帰りましょう」と、双子の姉妹の肩を揺すっていた。

先に意識を取り戻したのは愛梨の方だった。

高宮さんは熟睡している巡梨を背負うと、愛梨の手を引いて、無言のまま僕の隣を通り過ぎた。

「お父さん、またね」

「むにやむにや、パパあ……」

「おやすみ、ふたりとも」

玄関のドアが、ボタンと閉じられる前に、愛梨は、ひらひらと手を振り、巡梨は一昨年までの呼び方で僕を呼んでくれた。

誰もいなくなった玄関に立ち尽くしていると、背後にひとの気配を感じたので振り返る。兄さんだ。

「俺もそろそろ帰るよ。明日も早いしな」

「ああ、うん」

「あんまり気を落とすなよ、誠二」

「慣れているから、大丈夫だよ、兄さん」

兄さんは僕の髪がくしゃくしゃになるまで頭を撫でてから、それから革靴を履いて、颯爽と出て行った。

ダイニングに戻りテレビをつけ、すぐに消した。

テーブルに目を向けると、おつまみを盛った皿にはサララップが被せられており、二対のグラスは、水切り籠のなかへと移動させられていた。

電気を消して、寝室へ。

ベッドに倒れこんでから歯を磨き忘れていたことに気づいたけれど、もう起き上がる気力はなかった。

なんのことはない。

久々に娘たちと遊んで、僕も十分に疲れていたのだ。

／

翌日。

洗濯機を回し、シャワーを浴び、シフォンケーキでブランチし、VAIOを起動し、RSSリーダで目に付いたフィードを拾い読み、ホットエントリを流し読んでから、散歩に出かけることにする。

普段着として愛用している甚平のまま出かけてしまいそうになったけれど、直前でふと思いつく。クローゼットの前に立ち、ここ半年ほど袖を通していなかったスーツを身に着ける。スリーシーズンのものだから、真夏の炎天下を歩くのには向いていないけれど、何時間も歩き回るわけではない。

部屋を出て鍵を閉める。

目的地は定めていない。

気の向くままに坂をのぼり、公園のベンチで休み、線路沿いに歩いてみて、ガード下で涼み、

シャッターの閉まった商店街を歩き抜け、八十円の缶コーヒーを買い、それからまた歩き回り、いつの間にかあるマンションの前に辿り着いた。

「あの」

偶然、通りすぎたお婆さんに声を掛けてみる。

「はあ、なんでしょう？」

お婆さんは怪訝そうにこちらを見上げながら、けれども退屈な日常を紛らす話し相手を見つけたことを歓迎するように目を輝かせた。

「私、練馬警察署の中村と申します」と、兄さんから拝借した警察手帳を胸ポケットから取り出して見せる「この近辺で、この男を見かけたことはないでしょうか」

そう言いつつ、プリンタで印刷し、顔部分だけ切り抜き、ジップロックのなかに放り込んだ写真を見せる。

「はあ、ちょっと見せてください」

お婆さんは写真を受け取ると、老眼鏡を額のうえに跳ね除け、写真を顔に近づけたり、遠ざけたりしながら云々と唸った。

「見た覚えはないわねえ。ごめんなさいね、お役に立てなくて」

「いえ、構いません。失礼致しました」

お婆さんから写真を取り戻し、背を向ける。

いまのは予行練習に過ぎない。

これから本番だ。

頭のなかに地図を思い描き、満遍なく歩き回ることができるようルート検索しつつ、その一方で不確定要素を取りこぼさないよう、敢えて気まぐれに取捨選択を行い、恣意的に無意識性を助長する。

そうして一時間。僕は辿り着いた。被害者のマンションの向かい、ビジネスホテルのフロントが覚えていた。

「この方なら見覚えがありますね。何週間か前までは、週に数回程度、お泊りになられていました。職場の環境が変わったらしく、東京出張が増えたと仰られていましたね」

「宿泊するときに、なにか特徴的な言動はありませんでしたか？」

「そうですね。そう言えば、決まって同じ部屋をご要望されていました。その部屋が埋まっているときは、その隣がいいと頼まれましたね」

「その部屋を見せて頂けますか？」

「構いませんよ」

客室係に案内されたその部屋は、五〇二号室。

室内にはシングルベッドが一台、ズボンプレッサー、液晶テレビ、丸テーブルに肘掛け椅子。丸テーブルの脇には、電源のコンセントと、イーサネットの口があった。

「LANが引かれているんですか？」

「ええ、全個室に。フロントではLANケーブルを無料でお貸し出しさせて頂いております」

「そう」

他にも何点が質問させて貰ったけれど、特に新しい発見はなかった。

Aは、この部屋でひとり、なにをしていたのだろうか。室内に異常は残されていなかった。痕跡を残さぬよう、きれいさっぱり片付けてしまったのか、それとも本当に仕事の都合だったのだろうか。

「もう、よろしいでしょうか？」

「そうだな……ああ、最後に」

失礼、と一言、断ってからカーテンを引いて、外の風景を確認する。

そこに広がっていた光景は、事前に予想していた通りの、なんの変哲もない景色。

客室係に丁寧にお礼を述べてから、ホテルを辞すことにする。

自動ドアを抜け、熱されたコンクリートのうえに立ち、はあと溜め息を吐く。ホテルのなかは冷房が効きすぎていて、ちょっと肌寒かったので、いまだけはうだるような夏日が心地よく感じられた。

スーツのジャケットを脱ぎ、なるべく日陰を選びながら家路を辿る。

帰宅すると、ベランダに干しておいて洗濯物のなかから、愛梨と巡梨の水着だけが消えてなくなっていた。

ひとつの謎を追いかけたら、もうひとつの謎。

眼鏡のブリッジを中指で抑えながら、室内を一望する。ベランダに出るためのドアに鍵が掛けられている。そう言えば、玄関とダイニングを繋ぐドアがしっかりと閉められていた。確か半開きにしておいたはずだけれど。それ以外に変化はない。PCの脇に置きっ放しにしていたシフォンケーキの包み紙は、そのままにされているし、愛娘の水着以外の失せ物はない。

推理する。

これは身内の犯行だ。

下着泥棒ならぬ水着泥棒であれば、ベランダに出るためのドアに鍵を掛けることはできない。義一兄さんであれば、きっとシフォンケーキの包み紙を、ゴミ箱へ移動させていただろう。

消去法的に導き出される犯人の名は……、高宮さん。

きっと水着を取りに来たのだろう。

ただ、それだけのことだ。

そして、もうひとつ連鎖的に謎に気づき、瞬時に推理を完了させる。

昨夜、高宮さんは、どうしてうちに双子がいることが分かったのだろうか。きっとGPS機能。恐らく、愛梨と巡梨が持っている携帯電話にでも埋め込まれているのだろう。ふたりがどこに行っても、どこにいるか分かるように。

「やれやれだ」

寝室に入り、スーツを脱ぎ、コート掛けに掛ける。

すぐにクローゼットに仕舞いこむよりも、しばらく風に当てておいた方がいいだろう。

久しぶりに見知らぬひとと会話を交わしたら疲れてしまった。ベランダに出て、取り残された洗濯物を取り込んで、ソファのうえに放り投げる。

畳む気力はない。きれいな洗濯物の隣に、スラックスを脱ぎ捨て、寝室のベッドに倒れこむ。

睡魔に意識を刈り取られる直前に歯を磨いていなかったと思い出したけれど、残念ながら、あまりに遅すぎたと言わざるをえなかった。

目は夜明け前に覚めた。

気怠い肉体を引きずり、ミネラルウォーターを飲む。水を欲していたのか、面白いくらいに硬い水は、咽喉を滑り落ちていった。

ひとしきり冷たい水を楽しんでから、部屋を見渡すとソファに洗濯物が放り出されてあった。そうだ、昨夜は洗濯物を畳まずに寝てしまったのだった。

カーテンを開けると、日は昇ってないまでも東の空は明らみ始めていた。家具の輪郭が分かる程度に、室内が照らし出される。

普段の習慣でVAIOを起動したが、小さい画面に顔を近づける気になれず、外部ディスプレイを用いることにする。出力先は52V型BRAVIA。洗濯物をどかして、ソファのうえで体育座り。PCはテーブルのうえに置き、手元にはトラックボール型のマウス。ころころとボールを転がし、Firefoxを起動する。

と、右下にポップアップが表示され、Cドライブの空き領域が減ってきていることを教えてくれる。

Cドライブはシステム領域としてしか使っていないはずだけど.....暫し、頭を捻ってから思い出す。マイピクチャのフォルダを、巡梨のPCと同期させているのだった。大方、巡梨がデジカメで撮影した高解像度写真を、大量に取り込んで、それらがネット越しに転送されてきているのだろう。

とりあえずスナップショット領域を解放し、実効容量を拡張する。ただ、これは暫定的な処置でしかない。巡梨のPCから、どれだけの画像／映像データが飛んでくるかは分からないけれど、念には念を入れておくべきだろう。

最近、嵌まっている電子書籍のデータを、無線LAN越しに外部ストレージに移すことにする。どうせ、読むときはKindleかiPadに移すのだ、積読データを内部ディスクに抱えておく必要はない。幾つか所有しているストレージのなかで、デデュープ或いは重複排除の機能を持ったストレージに移動させることにする。ブロック単位で重複している箇所を探しだし、重複しているデータがあれば、そのブロックがそこにあったというメタ情報だけを記憶し、肝心の物理データは保存しないという機能を持ったストレージだ。電子書籍を保管しておくのには絶好の機能に違いない。

そうして空き領域を増やしながら、巡梨のPCから飛んでくるデータを受け入れていく。同時にデータは、無線LANを通じ、棚のうえのデジタルフォトフレームに読み込まれていく。それまで、遠足や運動会のときに撮った写真だけを表示していたフレームは、プールで泳ぐ愛梨や巡梨の水着姿も表示し始める。

ネットワークの負荷が高まってきたのか、Twitterのクライアントツールが重く感じる。暫く放置するか。

トラックボールから手を離し、脇の洗濯物へと手を伸ばす。

アイロンと洗濯物は、脳のリソースをまったく割くことなく、淡々とこなすことができるから

好きだ。

無言を貫き、無心に洗濯物を畳んでいく。

十分後、テーブルのうえに、精確に折り畳まれたシャツや下着が、山ではなく、塔のような様子を見せていた。

キッチンへ移動し、ミネラルウォーターを飲む。

変な時間に起きたからだろうか。身体が今ごろになって、まだ起きる時間ではないことに気がついたように、眠気を訴え始めていた。PCはまだ転送処理を続けている。起動させたまま、寝室に移動し、ベッドに倒れこむ。なにか忘れていたような気がしたけれど、そのなにかを特定できる前に、眠たさのあまりなにも考えられなくなっていた。

／

夢を見た。

夢と分かって見る夢は、明晰夢と言うそうだ。

そんなことを考えてしまえるくらいに、明瞭に夢であることを理解していた。

僕は近所の喫茶店にいた。ルーエという、小学校の同級生が経営している、小さな喫茶店だ。店内ではなく、テラスに出ている、木製の椅子に座っていた。テーブルを挟んで反対側には、梨花さんが座っている。左手の薬指に視線を走らせると、そこには小さな銀色の指輪が、木漏れ日を反射させていた。梨花さんのお腹は、まだ大きくない。きっと、梨花さんが御厨梨花から中村梨花となり、この世に愛梨と巡梨が生を受ける前の、僕の薄暗い人生のなかで唯一、輝いていたと言える頃だろう。

梨花さんは拳を握りなら、なにやら熱弁していた。声は聞こえない。夢のせかいの僕は、梨花さんの発言に、いちいち頷いていたけれど、店内から若いふたりを窓越しに見ているいまの僕には、なにも聞こえない。

飽きることもなく幸せなふたりを見ていると、店長の楼介に肩を叩かれた。

「なんだい、此町。おや、君も老けているね。まさか君も夢を見ているのかい」

「なに莫迦なことを言ってるんだ、誠二。電話だよ、電話」

「え、僕にかい？」

「他に誰がいるって言うんだ。相変わらず不明瞭な男だな、お前は」

「失礼な。ここは君の店だぞ、ここに掛かってくる電話ならば、十中八九、君に掛かって来ているものと考えるべきだろう」

「御託はいいから早く出るよ」

「手厳しい男だな、君は。それで？ 電話なんて、どこにあるんだい？」

「ベッドサイドだよ」

「え？」

目が覚めた。

携帯電話が鳴っていた。エリック・サティのジムノペディ。

ピッ。

「……はい、中村です」

「オヤジい〜、出るのが遅一よ！ トイレにでも行っていたのか？」

「ええっと……」

この声は、梨花さん？

いや。

梨花さんはこんな下品な言葉遣いはしない。

だとすれば、此町のイタズラか？

電話を耳から離し、抗議の声をあげようとして気づく。ここは自室だ、ルーエではない。楼介の姿もない。ここは寝室だ。僕は寝ていたのだ、寝て夢を見ていたのだ。明晰夢だと見抜いていたのに、いつの間にか現実と夢とが、逆転していた。

「なんか声が掠れてるなあ、オヤジもしかして寝てた？ もう昼だぜ、昼」

「ん、あー、あー」

「電話越しに発声練習すんなよ！」

「ごめんごめん、ええっと、巡梨かな？」

「イエア！ さすがのオレも二日連続で愛梨と間違われたらマジ凹むからな！ でも、不明瞭なオヤジのことだ。ちょっと心配だったぜ」

「巡梨。僕はいい加減な父親かもしれないけれど、愛娘の声を聞き間違えることはないよ」

「つい昨日、間違えただろうか！」

「そうだったかな？」

かもしれない。

「それで、こんな朝早くからどうしたんだい？」

「だから朝じゃねえよ、もう昼だよ。でも、その調子だと、まだ見てないようだな。昨日、撮った写真をパソコンに入れといたんだけど、届いてるかって確認したかったんだけどなあー」

「写真？」

ああ、そう言えば、寝る前に受信した記憶が残っている。

「見たよ」

「マジかよ！ 昨日の夜か？」

「いや、今朝。夜明け前にちょっと目が覚めたんだよ」

「なるほどなあ。で、どうだったよ？」

「んっ……」

ベッドから転がり落ちるようにして這い出て、ダイニングへ向かう。

PCの画面を覗き込んでみると、長時間、放置しておいたからだろうか、スリープモードに入っている。視線を横に滑らせ、棚のうえのデジタルフォトフレームへと向ける。

「……見えない」

「オヤジ、またメガネを掛け忘れてんだろ？ おかしいだろう、常識的に考えてさ、目が悪いんだったら、まずメガネを掛けるだろ、ふつー」

「どこに置いたかな？」

「それこそ知らねえよ！」

やれやれ。

目を細め、室内を見渡す。こういうときに現実世界をCtrl+Fできればいいのにと切望する。

——見つけた。

マウスの脇に置かれていた眼鏡を持ち上げ、早速、掛ける。

「どうだ？」

「見えるようになったよ」

「じゃなくて、写真の出来だよ！」

「ああ」

再度、デジタルフォトフレームへと目を向ける。

タイムスタンプの新しい画像を優先的に表示させる設定になっているから、娘たちの水着姿が高頻度で現れる。

「愛梨はかわいいな」

「って、愛梨かよ！ あのなあ、電話してるのはオレだぜ？ 巡梨だぜ？ ふつう、ここはオレを褒めるだろうが！」

「ごめんごめん。あんまり映らないから」

「……まあ、撮影していたのは主にオレだからな、愛梨の写真が多いのも尤もだ。でもさ、オヤジ。その内、オレが出てくるはずだから、目をサラにようにして、タコができるまで見つめていてくれよ」

「巡梨」

「ん？」

「タコが出来るのは耳だよ」

「国語の先生かよ……」

娘の突っ込みを受け、唐突に思い出す。そう言えば、彼女と同じ年くらいのとき、将来は国語の先生になりたいと思っていた。だからなんだという話だが。

そんな愚にもつかないことを考えながら、デジタルフォトフレームを見ているうちに、とうとう巡梨の写真が表示された。

「見たよ、巡梨。梨花さんの若いときに似てるな」

「——ッ！！」

思った通りのことを口にした。

遠い昔、梨花さんとプールに行ったとき。梨花さんは、昨日、巡梨が着ていたのと同じような、セパレートタイプの水着を着て、恥ずかしそうに腕を組んだりしていた。

次の写真も巡梨だった。

その次の写真は、愛梨と巡梨がふたりとも写っていたが、僕の視線は、巡梨の姿を先に捉えていた。

久しぶりにせかいが明瞭だ。

それに思考も明瞭だ。

スナップショット、デデュープ、ツイッター、クライアント、グローバル・ポジショニング・システム。

幾つかのキーワードが脳裏に去来し、それらが過ぎ去ったとき、僕は推理を完了させていた。解像度が極限まで高められた、この明瞭なせかいで、僕に見えないものは、ない。

「巡梨」

「えっ、なに？」

「急用を思い出した、切るよ」

「あ、うん。またね」

「ああ。またな」

ピッ。

オンフックボタンを押し通話を終了し、そのままアドレス帳を呼び出し、中村義一の項を指定する。

電話は三秒後に繋がった。

「誠二か？ 解けたのか？」

「明瞭に」

「分かった、十分以内に行く」

返事する間もなく、電話は切られてしまった。

やれやれ。

溜め息をひとつこぼしてから、テーブルのうえに積まれていた洗濯物を箆笥にしまうことにする。

兄さんは七分と待たずに来訪した。

／

「最初にやったのは、被害者がネット上に残した痕跡を探すこと。

最も容易に見つかったのはTwitterに残されたPostの数々。月に5000件を超過するPost数は甚大で、被害者の生活感に満ち溢れていた。

Postを眺めていると、大きくふたつの種類に分けられることに気がついた。ひとつはクライアントツールからのPost、もうひとつはiPhoneアプリからのPost。発言内容から前者は自宅から、後者は外出先からのPostであることが類推できる。さらに、iPhoneアプリからのPostにはGPS情報が付属されていた。被害者は朝昼晩と食べたものを撮影すると同時にPostし、出社したタイミングでPostし、帰宅したタイミングでPostしていた。ある意味、被害者はTwitterを、ライフログを残すためのツールとして使用していたようだ。過去には、思ったこと感じたことのすべてをPostしておき、そのRSSをGmailに飛ばし、さらにEvernoteに転送させることで、いつでも思いついたことを検索し、参照できる環境を構築したと自慢していた。

言い換えると、被害者は自ら個人情報を公に発表していた。これらの情報はWebから見ている

だけでは分からない、Postに埋め込まれたソースを拾い出せるツールを用いる必要がある。そして、そういったツールを用いて、被害者のPostを見返したとき、彼の勤務先や、彼の自宅は容易に特定できてしまう。

けれど、TwitterのPostから入手できるGPS情報は、精度が低く、彼本人に辿り着くことまではできない。それは、あくまで彼の勤務先の住所や、自宅の住所が分かるレベルだ。GPS情報だけでは、彼がどの部署に所属しているかも、彼の部屋がマンションの何階なのかも分からない。

Aは足を使って被害者を、自力で特定した。被害者が階段から突き落とされて命を落とす数週間前から、Aは被害者のマンションの向かいに建っているビジネスホテルを頻繁に使用していたそうだ。その際、Aはいつも同じ部屋を指定していた。実際にその部屋を確認したが、おかしいところはなかった。窓のそとには被害者のマンションが目の前に見えていて、なんのふしぎもない。だが、そこだったんだよ。Aが好んで使用した部屋の窓からは、向かいのマンションが余すところなく一望することができた。目を瞑れば想像できる。窓際の椅子に腰を下ろしたAは、被害者が『帰宅ったー』とPostするのを、静かに待っている。ついにその瞬間が訪れたとき、Aは慌てず騒がず、手元のデジカメを持ち上げ、ぱちりと向かいのマンションを撮影する。

実施したのは重複排除の逆、重複抽出だろう。何枚ものスナップショットを重ね合わせたり、見比べたりして、被害者が『帰宅ったー』Postをした直後、明かりのついている部屋はどこか？

それをAは抽出したんだ。後はマンションの入り口でポストと表札を確認するだけ。それで特定できる。以上、証明終了、だよ」

大きく溜め息をついてから、兄さんが買って来た缶コーヒーを咽喉に流しこむ。

香りも重みもなく、コーヒーの味だけを模したような液体であっても、いっぺんに喋りすぎて、咽喉が渴いていた僕には心地よかった。

黙って聞いていた兄さんは「そうか」と頷くと立ち上がった。

「帰るの？」

「ああ、いまの仮説、サイバー犯罪対策室に投げてみよう」

「僕の見たせかいだって言わないでよ？ 御厨のひとに知られたら.....困るから」

「任せておけ、署長にはいつも通り、俺が自力で気がついたと伝えておくよ」

「まあ、既にばれているような気もするけどね。肉体派の兄さんは、Twitterのツの字も知らないだろうし」

「そうそう、ツイッター、さっきから気になっていたんだ。竜巻の一種か？」

「.....そうだよ」

兄さんは白い歯を見せて、爽やかに笑うと「そうか、ありがとう、助かったよ誠二」と言うから出て行った。

ダイニングに戻り、缶コーヒーを持ち上げる。中身は半分以上残っている。少しもったいないけれど、全部を飲みきることはできない。心のなかで兄さんに詫びを入れつつ、僕は、茶色い液体を流しに捨てた。

三日後。

ねこ写真のまとめサイトを見ていたら、携帯電話が鳴り出した。

立ち上がって取りに行くのが面倒だったので、コマンドプロンプトを立ち上げて、携帯電話への着信を、Skypeへ転送させて、スピーカモードで通話開始ボタンをクリック。相手の声は天井のスピーカから流れ、こちらの声はPC内臓のマイクが拾ってくれる。

「お疲れ様」

瞬間。せかいは色を失い、急速ににじみ、不明瞭になった。

「お疲れ様、誠二さん」

天井から降り注ぐ声音、それは天使の囁きのようであった。

「……、……梨花さん……」

からからに渴いた口から、いまにも消え入りそうな声が漏れでる。

微かな声だったけれど、優秀なマイクは見事に拾いあげてくれたようだ。

「いいえ、ごめんなさい、お父さん。私なの」

「……愛梨、か」

「はい、愛梨です。さっきのはお母さんからの伝言なの」

「そうだったのか、はは、驚いたよ。愛梨は梨花さんの声にそっくりだな。さすが親子だ」

「お父さん、久しぶりにお母さんみたいな声が聞けて嬉しかった？」

「ああ、嬉しかったさ。でも、愛梨の声が聞ける方が、もっと嬉しいよ」

「くすくす、もう、お父さんったら、そんなこと思ってもない癖に」

「そんなことないよ。そうそう、巡梨に送って貰った写真を見たよ。もう、すっかり泳げるようになったんだな」

「私がカナヅチだったのは、だいぶ前のことよ」

「そうだったかな」

「酷い、もっとちゃんと見てて」

「ははは、悪かったよ、愛梨。きっと眼鏡を掛けていなかった時のことだろう」

「また、そうやって、お父さんったらすぐに眼鏡の所為にするんですから」

映像は送られてきていないけれど、巡梨の前ではおとなしい愛梨が、拗ねたように唇を尖らしているのが容易く想像できる。

時間を忘れて娘との会話に耽ったが、やがてお手伝いさんに食事の時間を告げられたらしく、愛梨は残念そうに別れの言葉を口にし、通話を切った。

再び静寂を取り戻した部屋のなか、ソファに座ったまま、白い天井を見上げる。

スタッコ調の様子が織り成す陰影を見つめているうちに、眼鏡を掛けっぱなしでいたことに気がつき、慌てて外し、テーブルのうえに放り投げる。視界が不明瞭さを取り戻す。

これでいい。

嘆息。

せかいが明瞭であることは、必ずしもいいことであるとは限らない。

ときには見たくないものを見てしまい、気がつかなければよかったものに気がついてしまう。

そう、例えば僕こと中村誠二と、梨花さんこと御厨梨花の間に横たわる、社会的な見えない壁であるとか。

やれやれだ。

シャットダウンコマンドを打ち込み、PCを閉じる。

部屋の電気を消して、寢室に逃げ込む。

ベッドに転がり込みながら、僕は、自分が、ただ逃げているだけと知っていながら、立ち向かうだけの勇気を持ち合わせていないことに絶望する。歯を磨いていないことは眠りに落ちる前に思い出したけれど、眼鏡をかけて、歯ブラシを握り、鏡に映る自分自身を直視しなければならないことを思うと、起き上がることなんてできなかった。

いつまでも沈んでいたい。

この不明瞭なせかいに。

"Detective Family's unCleared World" is over.

But, his world is not cleared yet...

to Be continued...?

不明瞭世界の探偵親娘

<http://p.booklog.jp/book/40020>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40020>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40020>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.